

「ひみつのひみつの」

——つながりを求める心——

## 牛山佐智恵

子どもたちがごっこ遊びで交す言葉には、すぐにはその意図がわかりかねるような微妙な表現のものがあります。とりわけ、仲間とのつながりを確かめたり、仲間でない者を退けたりするような言葉には、ぬきさしならぬ厳しさがあって、それだけに表現も巧みさを増します。それぞれの子がその言葉にこめたものをあれこれと思い返すとき、自分の身の置きどころを懸命に求めている子どもたちの願いがおぼろげながら見えてきて、はっとさせられることがあります。

ある日、年長組の女の子たちがおうちごっこをやっていました。メンバーは七人、Yちゃんをはさんで左右に並ぶように集うと、さっそく粘土で何やら作り始めました。

「ぎょうは、びだからね」とまずYちゃん。隣のMちゃんが、「びだもんね」と返しま

す。その隣りのSちゃんは、「びじゃないよね」と言ったかと思うと、「きょうは、た・ん・び」と言いかけて、「タンプリンだからね」と言い直します。またしばらくすると、Sちゃんは、「たんじょ」「たんじょ」と繰り返します。

メンバーの中で、粘土に手を出さないのはSちゃんひとりでした。その手には色紙がありました。これといったものを作る様子はありません。Yちゃんが言った「び」にあたる言葉を探して、それをしきりに口にするばかりです。その様子は、仲間うちだけに通じる言葉を使うこと自体に興奮しているといったふうでした。

私はふと、その前日のSちゃんを思い出しました。お昼どき、この子はたったひとりでお弁当を食べていました。その日の午前中も、Sちゃんは同じおうちごっこに加わっていたのですが、その加わり方は微妙なものでした。

この子は、みんながいそいそとおうちを作っている脇で、「おふる作れば」とか、「冷蔵庫がないよ」とか、誰に言うともなく声高に言いました。しかし声高ではあっても、その言葉はいつも受けとる相手もなく通り過ぎていきました。Sちゃん自身も、そうしてあれこれ提案はするものの、自分からは何を作ろうとするでもなく、ただうろろするばかりです。その声がひとときわ高く、しかも頻繁であっただけに、私にはこの子のさびしさが気にかかりました。

このときの様子に比べると、「び」を盛んに言い換えてはしゃぐSちゃんは楽しげでした。いっこうに手は動く気配もありませんでしたが、Sちゃんはこのおうちごっこで意外

な働きをしました。

この子たちのおうちは、部屋の一部にありました。他の隅では、別のグループがおうちを作っていました。時々そのグループから、ひとりふたりと様子をうかがいに来る子がいます。「び」をひそかに確認し合ったこのメンバーにとって、そうした訪問者は、いわば都合の悪い部外者でした。

その到来をいち早く見つけるのがSちゃんでした。「そこ線路だよ——Sちゃんはそう言って、近づく相手をかわそうとします。なるほどそこには線路らしきものがあります。相手もそれを認めるが早いか、さっと立ち去ります、しばらくすると、次の訪問者が——メンバーの誰かが、「あっ、そこお便所」と言います。続けてSちゃんが、「そこ、お便所」と叫びます。そこには便所らしきものは見当たりませんが、相手は飛びのくように去っていきます。その様は、これらの言葉にこめた意図を、両者が互いにすっかり了解し合っているような見事なものでした。

ところで、私はそんなSちゃんにまずはほっとしつつも、やはりどこかに空しいものを感じたまま、その様子をながめるほかありませんでした。気がかりなのは、ほかのメンバーが「び」の一言で確認し合った約束事を、なぜこの子がことさらに口にするのかということでした。

確かにそれは、仲間と秘密を共有していることのうれしさの表現として受けとれるものでした。しかし同時に、この子が相変わらず集団の周辺部において、自分がその一員である

---

ことを絶えず仲間に向かって確認せざるをえない姿のようにも思えました。部外者の追出し役を果たしたことに、集団の周辺部にあつて、その内側にあるうとする者の願いが見えるように思つたのです。実際、Sちゃんが「たんじょ」「たんじょ」と騒ぐのは、粘土に余念のない仲間たちが、思わず愉快な声をたてたようなときでした。

ところが、この日は、そんなSちゃんの声に一度だけ仲間からの応答がありました。それは、Sちゃんの隣りにいたEちゃんからのものでした。

Eちゃんは、Sちゃんの「たんじょ」に、「び」と続けました。「たんじょうび」——その応答は、Sちゃんの秘密を事もなげにあはくものでした。ですから私は、この応答がSちゃんにはちよつと迷惑なものだったろうと考えていました。

というのも、Eちゃんは、どちらかというと言葉に幼なさを残す子でした。時々やってくる部外者への対応も、「来ちゃいけない」ともろに言つてにらむというものでした。ですから、秘密として語ろうとするSちゃんの意図が、Eちゃんには通じなかつたところに、二人の応答が生まれたように思つていたのです。

ところが、このときの二人の様子を思い起こすうちに、Sちゃんが求めていたのは、あるいはEちゃんのような対応ではなかつたかと思うようになりました。

Eちゃんは、粘土を取り出す前しばらくは、Sちゃんにつきまとうように、その後を追つていました。目当ては、Sちゃんが持っていた木片でした。「これ、使つていい？」——率直な申し出で、やつとその木片をもらい受けると、EちゃんはSちゃんに寄り添うよう

---

に並んで座り、ほかのメンバーと同じように、粘土でパーティー用のごちそうを作り始めました。Sちゃんの「たんじょ」に「び」と返したのは、隣のSちゃんに向かってニコッと笑いかけた直後のことでした。

一方、Sちゃんの方は、その後どこかへ出かけたかと思うと、また木片を持って帰ってきました。「Eちゃんにあげる……積木にすれば」——そう声をかけて、SちゃんはEちゃんにその木片を差し出しました。それからSちゃんはやつのことで粘土に手をつけ、「あ」とはこれだけ作るのだ」と言う、「ひみつのひみつの」と歌うようにはしゃいだのでした。

二人の応答のかけに、こうしたやりとりがあったことを、私は自分のふがいなさとともに思い起こしました。Sちゃんの思わせぶりの言葉に惑わされて、なすすべもなくながめていた私に、もっと大事なことがあることを教えてくれたのは、むしろ言葉のやりとりには巧みさを欠くEちゃんだったからです。

Eちゃんとのやりとりに見たSちゃんの様子は、それまでのこの子の動きに比べると、ずっとひそやかなものでした。誰に向けてというでもなく声高にしゃべること——それは誰かと確かにつながっているという実感に乏しい子が、その言葉を受けとってくれる誰かの出現をただただ待ち望んでいる姿なのかもしれません。実際、親しければ親しいほど、ちらと視線を交したり、ちょっと耳うちするだけで、互いに事足りるものです。私は今、「ひみつのひみつの」と歌うように言っではしゃいだSちゃんの声を、内実のある秘密を共有できる相手を求めての懸命の叫びとして思い起こしています。

(長野幼稚園)